

令和7年10月15日(水)



職員室のある特別棟から各学年の教室を結ぶ2階連絡通路の窓際に観葉植物が並んでいます。これは、教職員が置いたものです。ここは、生徒と教職員がもっとも多く通る場所なので、気づいている人も多いことでしょう。私も毎日何回もここを通るので、そのたびに眺めています。生活の場に植物を置くことは、インテリアとしての見栄えであったり、空気の浄化という環境向上であったり、さまざまな効果が期待されています。難しい理屈を抜きにしても、ふと目に入る緑は心がリラックスしますし、日々の成長を楽しみにしている自分がいることに気づきます。心のゆとりと潤いを与えてくれるのが植物のよさですね。



2枚の写真は、上が国語の授業、下が社会の授業です。どちらも1年生でした。国語は、説明文の読解で、本時のねらいは「論の展開を整理する」ことです。社会は、地理的分野で、本時のねらいは「西アジア・中央アジアはどのように経済発展したか」を考察することです。両者の違いは、アナログとデジタルです。国語は、ホワイトボードに手書きして黒板に並べ意見を共有し、社会はスクールタクトを使ってタブレット上にまとめ、ワードクラウドで傾向を把握しています。アナログであれ、デジタルであれ、協働的な学びを取り入れ、考えを深めているのと同じ。手法の違いはありますが、どちらも本時のねらいにせまる授業を展開していました。アナログやデジタルは、両者の強みを理解した上で自分で選択することが最終的な目標です。学校では、両者を経験することにより自分の中の引き出しを増やしていくことをねらっています。昔は、紙と鉛筆と黒板が学びの基本であり、全てでした。これからは、アナログとデジタルのベストミックスを体現することが、一人一人に求められます。その時々に応じて、何を選び、何を捨てるか、最後に判断するのは自分自身です。



2年生の国語は、向田邦子氏の随筆「字のない葉書」をもとに、描写の文について学びました。描写の文とは、具体的な様子が分かる文のことです。いくつか例題に取り組んだあと、先生から示された説明的な文「彼女にふられた。僕はとても悲しかった。」の下線部を、描写の文に書き換えます。「心に穴があいたようだった。」「涙が滝のように溢れて止まらなかった。」「僕は色のない世界にいるようだ。」など、生徒たちの発想は、なかなか趣深く、詩的で豊かな表現をしていました。

